

## 居場所とウェルビーイング

第2回

# 福祉に欠落しがちな地域づくりの視点 ラベリングされた場所に人は来にくい

全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長 湯浅 誠



今回は、つながりを生む場としての居場所とウェルビーイングの結びつきを具体的に考えたい。

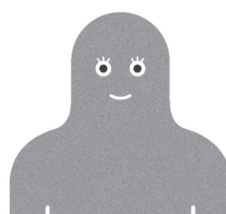
宮崎県三股町に「コミュニティデザインラボ」（以下、ラボ）という団体がある。一度、ホームページ（<https://commulab.jp/>）を見てほしいが、デザインラボというだけあって、スタイリッシュなデザインが目を引く。トップページに出てくるのは「2023、158、1950」という数字だ。よく見ると、この数字は「2025年までに、200の活動と、2025人のプレイヤーを生み出す」という団体のミッションが、閲覧日にどこまで到達したかを示した数字だとわかる。であるから、読者の方が閲覧する日には、この数字も変わっているだろう。

### 社協の独自活動「よる学校」が注目集める

続いて、読者が住んでいる自治体の社会福祉協議会（以下、社協）のホームページを開いてほしい。多くの場合は、「よくある体裁」なのではないか。実は、ラボは三股町社協の組織内団体だ。近年は、このような社協が生まれ始めており、注目を集めている。公的な性格が強いものの、社協も民間団体だ。行政の補助金・委託金だけに頼らず、独自の活動を展開して財源の多様化を図るためには、「よくある体裁」からの脱却も必要だ。

「デザインは、従来の福祉イメージには反応しないタイプの地域住民の関心を惹起<sup>じやつき</sup>するのに重要」と語るのは、ラボを立ち上げた三股町社協職員の松崎亮さんだ。同時に「デザインが効くのは入口まで。その後は中身がないと持続しない」とも言う。たかがデザイン、されどデザインといっ

図1 よる学校のスタッフのタグの例（ホームページより）



今のところ…

- #社協職員
- #本が好き
- #面白いことが好き
- #遅刻常習犯
- #スマホの充電切れがち
- #DJ
- #フリースタイルラップ

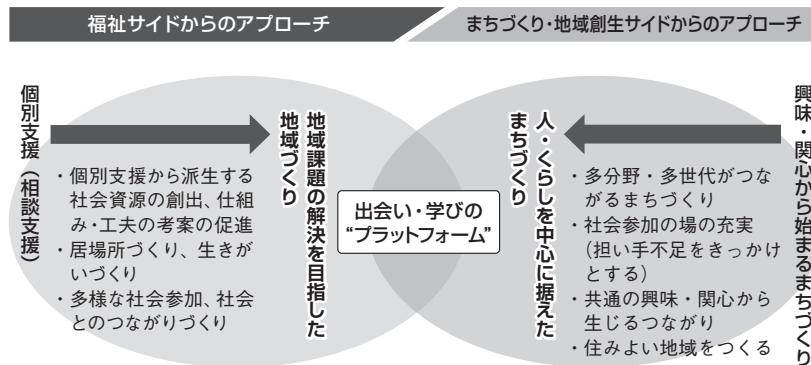
たところだろうか。その中身に関して、ラボの特徴を示す取り組みも始まっている。「よる学校」だ。そのコンセプトはラボのブログ「謎が謎をよぶ『第1回よる学校説明会』」に記されている（<https://commulab.jp/magazine/yorugakkoinfo/>）。

「よる学校」では、参加者が自分につけるタグ（#ハッシュタグ）が起点となっている。例えば、あるラボスタッフのタグは図1のようになっている。社協職員でもあり、本好きでもある。タグをつけることで、いろいろな人と出会える。

小学生Aくんがつけたタグは4つだ。「#学校に行けていない」「#学校に友達がありません」「#マイクラフト面白い」「#体を動かして遊びたい」

「福祉」は一般に、このうちの「#学校に行けていない」に着目してきた。そして「不登校支援」というカテゴリーの中でのみ、Aくんのことを考えてきた。しかし「よる学校」で注目したのは、「#体を動かして遊びたい」というタグだ。それにより、Aくんはスポーツの活動を通していろいろな人と会うことができた。Aくんはある日、独学のブレイクダンスをみんなの前で披露し、

図2 多様な主体による地域活動の展開における出会い・学びのプラットフォーム



出所：厚生労働省資料

一躍この場の人気者に。すると、4つのタグに「#自分っておもしろい」「#ブレイクダンス楽しい」など、新しいタグが増えていったのだという。

### 「本当に必要な人になかなか届きにくい」

なぜか。理由の一つは「ラベリング」だ。ブログでは次のように分析している。「まず一つ目は、ラベリングされた居場所には人は来にくいということ。ラベリングとは、『高齢者』『ひきこもり』『貧困』など、福祉分野という政策的な属性のこと。それらもとても大切ではあるのですが、実際には、ラベリングされていることで、そのラベルを意識してしまい、本当に必要な人になかなか届きにくいという側面もあります」

さらに続ける。「居場所には、『支援機能』と『交流機能』があるとされていますが、『支援機能』に寄りすぎると、そこからなかなか広がらないという課題もある」。だからこそ、よる学校は「タグ」という概念をポイントにしているという。

不登校支援を行いながら、必要な人に支援が届かないという嘆きをよく聞く。いじめ相談を行いながら、必要な人に支援が届かないという嘆きもよく聞く。その際にネックになっているのが「ラベリング」だ。病院や相談窓口のようなラベリングされた場合は、人に「自分はそこに行く必要があるだろうか」という問いを生じさせる。一方、趣味や関心に関わる場合は、人に必要性を自問させない。人が問うのは単に「自分はそこに行きたいか」だけだ。それがラベリングされていない、と

いう意味だ。

必要性を自問したとき、多くの人の答えは「まだ大丈夫。そこまでの必要性はない」となる。だからラベリングされた場に、人は行きたがらない。これに対して「気にしなくていいよ」と呼びかけ、「相談しやすい雰囲気づくり」を心がけるのは重要だ。福祉はずっとそれをやってきた。しかし、

ラベリングされない場を創り出す工夫は積み上げてこなかった。「よる学校」は、その工夫をしている。

体を動かして遊んでいれば、再び学校に行けるようになるのか。行けるかもしれないし、行けないままかもしれない。しかし、それは福祉的な不登校支援を行っていても同じことだ。重要なのは、Aくんが「#自分っておもしろい」「#ブレイクダンス楽しい」と自己肯定感を高め、ごきげんになっていくことではないか、とブログはつづる。その状態をウェルビーイングという。

### 福祉的な発想の域を出す

これは厚生労働省の重層的相談支援体制整備事業でうたう「出会い・学びのプラットフォーム」づくりだ（図2）。この事業は2023年度に189自治体を実施し、移行準備事業には280自治体が参加するなど全国に広がりつつある。だが多くが相談・参加の支援に偏る。困っている人の相談を受け止め、多職種で連携し、居場所や就労支援につなげるといった福祉的な発想の域を出ていない。

欠落しがちなのは、不登校の子が体を動かしたら人気者になれたという出会い・学び、体を動かすのが好きな人がそれを通じて不登校児への理解を深めるといった出会い・学びの機会の創出、つまり「まちづくり・地域づくり」の視点と実践だ。それには、居場所とウェルビーイングを重ね合わせる視点と実践が必要だ。「よる学校」は、そのことを私たちに教えてくれる。 **G**